

ふるさと安曇野 きのうきょうあした

No.8 2012.10.20

安曇野のオフネ祭りの来し方行く末



水田の水鏡に映るお船
(三郷中萱熊野神社 2012年8月26日)

「いなかのお祭りだと思って担いできたオレたちの舟をみんなが見てくれるなら…。」オフネ祭り展への参加をお願いしたとき、ある祭典保存会のみなさんが口にされた言葉です。平成24年度年秋季特別展「安曇野のお祭り展Ⅰ～オフネがつなぐ地域の輪～」へ出品参加する機会を通し、自分たちのお祭りを見直して自信や希望を膨らませていることにあちこちで気づきました。

安曇野を特徴づける祭りであるオフネ祭りは、現在も市内全域の30余の神社で行なわれています。豪華な人形飾りや、船べりで揺らぐ口ウソクなど各地域特有のオフネが曳かれ担がれるお祭りは、春から秋の風物詩といえるほど盛行しています。

また、「穂高神社の御船祭りの習俗」は長野県無形民俗文化財として、「重柳八幡宮祭り舟」、「住吉神社のお船祭り」、「潮神明宮の柴舟と人形飾り物」、中萱の「熊野神社のお船祭り」は安曇野市無形民俗文化財に指定されており、守り伝えるべき重要な文化財としても認められています。さらに、今後新たに指定される祭りもあることでしょう。

しかし、残念ながらすでに廃絶してしまったものも少なくなく、現在祭りを催行している地域でも後継者不足などの課題も深刻化しています。一方で、新たなオフネ祭りを始めたり、数十年、数百年途切れていたオフネの制作を復活させる動きもあります。

地域の絆で受け継がれてきた安曇野のオフネ祭りです。できるだけ多くの方に知っていただきたいと考えオフネの特集を企画しました。オフネや祭りの魅力、その歴史やナゾを探しに、ぜひ多くの「オフネ祭り」に出かけてみませんか。

※オフネの名称は「御船」「柴舟」「山車」など地域ごとに多様で、表記も様々です。本紙では、様々なオフネを総称して「オフネ」と表記し、個別のオフネをさす場合はその地区で使われている表記や名称を尊重しました。そのため表記が統一していませんが、ご了承ください。

◆◆ オフネ祭りの歴史 ◆◆

オフネのはじまりはいつ？ オフネ祭りはいつから行われていたのでしょうか。そして内陸にある信州安曇野の祭りの場で、海の乗り物であるフネが圧倒的な存在感を示しているのはなぜなのでしょう。

このような観点から、安曇野のオフネ祭り、安曇氏(阿曇氏)とのかかわりを推測している著書や論文も少なくありません。安曇氏は北九州の出身の古代の氏族で、漁業や航海など、海を舞台に生活していた「海人」と呼ばれる人々を統率しました。

また、少なくとも平安時代には成立していた穂高神社や、中世に周辺の村々の鎮守となっていた住吉神社では、海の神を祀っていることもあり、安曇氏と安曇野、そしてオフネ祭りのつながりを想定する説も出されています。

しかし安曇氏そのものが信濃国に入ってきたという説には慎重な見方もあり、オフネ祭りを結び付ける証拠も確認されておられません。

一方、オフネ祭りは安曇野だけでなく、諏訪地方でも行われており、毎年8月1日に行われている諏訪大社下社のお船祭りで出される柴舟が安曇野へ伝播したという説もあります。

いずれにせよ、安曇野市内のオフネ祭りのことを記した古文書等にオフネ祭りが行われるようになった経緯が記されているわけではありません。オフネ祭りがいつごろ、どのようにして行われるようになったのか、結論を出すことはまだ難しいようです。

オフネ祭りを記した最古の古文書 安曇野市内のオフネ祭りについて最も古い記述がみられるのは、穂高神社に關係した古文書です。

現在、穂高神社には、穂高区・穂高町区・等々力町区の3地区が御船を奉納しています。この3地区の前身は、江戸時代の保高村・保高

町村・等々力町村の3ヶ村でした。今から300年ほど前までは、これに等々力区の前身である等々力村が加わっており、あわせて4ヶ村が当番を決めて毎年2艘ずつ御船を出していたようです。

しかし江戸時代中ごろの正徳5年(1715)、この4ヶ村のうちの等々力村だけが松本藩領からはずれてしまいました。当時の松本城主であった水野氏が分家を出すにあたり、等々力村を始めとする安曇・筑摩両郡のいくつかの村がその分家の支配となったのです。これに伴い、等々力村は穂高神社の祭礼には奉仕するものの、御船は出さなくなりました。

この顛末を記した古文書に正徳5年の年号が入っており、これが御船祭りのことを記した最古の古文書だと言われてきました。しかし安曇野市教育委員会と穂高古文書勉強会のみなさんが市内に残る古文書の調査を進める中で、さらにさかのぼる文書が存在することを確認しました。



元禄2年の穂高神社の御船祭りに関する古文書 (個人蔵)

それは、等々力村の御船のことを書いた古文書です。元禄2年(1689)の年号が入っており、正徳5年よりさらに20年以上さかのぼるものです。

ここには、船1艘を出すに当たって、「はね木」や「なる木」などの用材を「天魔が沢山」つまり天満沢の山から切り出す許可を松本藩に願ひ出たことが書かれています。「はね木」は

オフネの側面に斜めに取り付け、これを基準に腹の部分や飾り物を作っていくので、重要な骨格材です。また「なる木」はオフネの腹の湾曲を形作る木です。

これらの用材を天満沢の上流の山から切り出していました。江戸時代後期の文政年間まで、御船の用材には必ず新しく切り出した木を用いることとされていましたが、天満沢山が崩れたことで木が切り出せなくなると、古い木を用いるようになりました。

安曇野市内のほかの地区のオフネ祭りも、それぞれいつから行われていたのか、わかっていません。しかし今回の発見で、穂高神社では今から約320年前の元禄年間にはすでに行われていたことが明らかになりました。また、明科東川手の潮神明宮では寛政3年(1791)には舞台が曳かれていたともいわれていますし、現在住吉神社に奉納されているお船は、文政11年(1828)のものが原型だと考えられています。

穂高神社の御船の変化 先に掲げた元禄2年当時、穂高神社の御船にはまだ車輪がなく、担いでいたようです。これより約30年後の享保2年(1717)の古文書には、「舟かつぎ人足」という表現がみえています。

車輪がついて曳行するようになったのは、江戸時代後期に入ってからのようなようです。天保13年(1842)の祭りには御船の進行方向を修正する「ねじ木」や、停止していた御船を動か

すための「てこ木」といったものが用意されていました。

車輪をつけたことにより、御船も次第に大きくなっていきました。

現在、市内で担ぎ舟が残るのは、堀金烏川の岩原山神社だけです。オフネの古い形態を伝えるものとして貴重です。

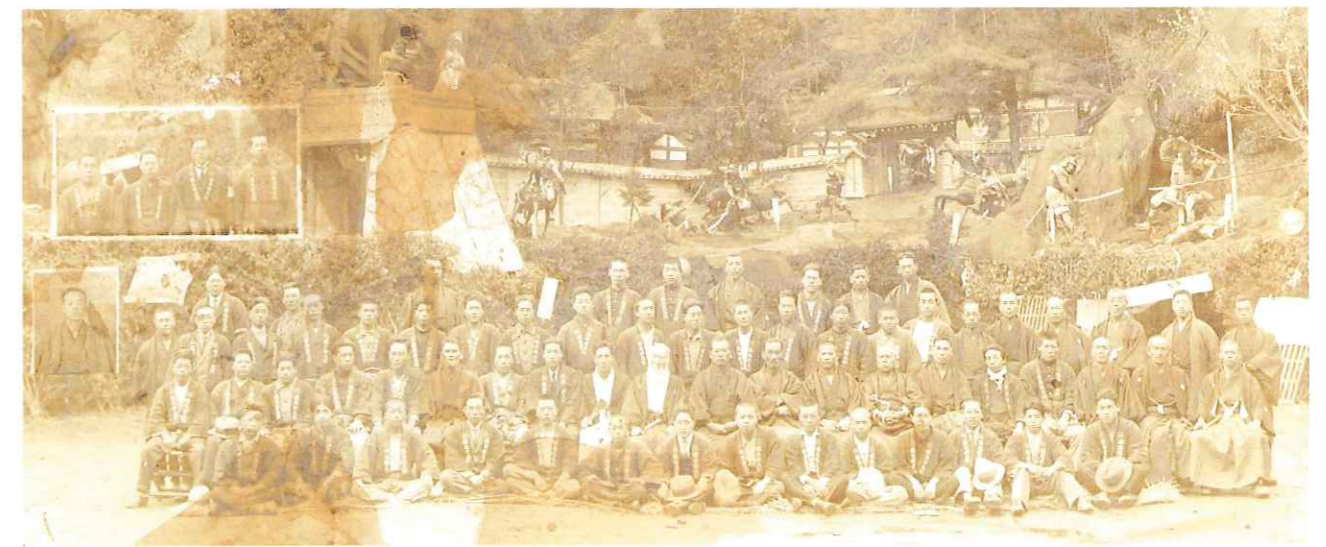
◆◆ オフネの祭りの担い手 ◆◆

青年たちの活躍 オフネ祭りを盛り上げていたのは、村々の若者たちでした。

住吉神社では、江戸時代に庄屋・組頭の指揮のもと「若キ連」が祭事を行いました。明治30年(1897)までは、耕地総代のもとで「若キ連」が活動する形が続きます。その後も「楡区青年団」「祭典係」などと組織は変わったものの、お船祭りの担い手は村の若者たちでした。現在は「楡祭り青年」によって運営されています。

穂高区で御船を奉納する「睦友社」は、明治時代に発足したと言われていています。戦前は、学校を卒業して25歳になるまで「睦友社」の社員として穂高神社の御船祭りや遷宮祭などで大きな役割を果たしました。

戦争の激化に伴い、多くの若者たちが徴用され、オフネ祭りも存続の危機を迎えたものの、戦後、郷里に戻った若者たちによって、かつての賑わいが取り戻されました。



昭和4年の穂高神社の大遷宮祭の飾り物と「睦友社」の青年たち

一旦、活を取り戻したかに見えたオフネ祭りも、やがて担い手不足の時代を迎えます。その時期は地域によって差がありますが、近年は、都市部へ流出する若者が増え、地域を支える若い力が減っています。

そのなかで残念ながら途絶えてしまったオフネ祭りもありました。

現在も続いているオフネ祭りでは、保存団体などを組織して運営している地区も少なくありません。

コラム ① 流れてきた神とオフネ

市内で現存する唯一の担ぎブネが堀金岩原山神社のお舟です。岩原山神社は、現在は岩原の産土神ですが、かつては烏川谷で入会林野として関わった全23ヶ村の山の神として祀られていました。その山の神は、大昔に烏川上流の対岸に鎮座していたものが大水で流され、それを岩原の人たちが引き上げて現在の場所に迎えたと言伝えられています。流されてきた神様については定かではありませんが、祭典とお舟の曳行で興味深い事例があります。

まず、センドイシを3周する『オフリヨウ渡し』の神事ですが、神社境内のセンドイシ(舟渡石)を3周する他にはもう一つのセンドイシをまわる独特のやり方をしています。舟渡石の場所は、古道の千国道において渡し場となっていた浅瀬であり、流れ下ってきた社殿をここで引き上げたと言伝えられている特別な場所です。もう一つ、流れた神社があった場所は牧地区ですが、祭典では牧の幟旗を持った代表の人が到着しないと絶対に始まらないとされていました。

かつて大水で川を渡れなかった時、対岸の牧の人たちが幟を振りそれを確認する形でようやくお祭りができたと伝わっています。今でも岩原の人たちは山の神が流れてきた神様だと信じ、オフネ祭りでも牧だけは客分として格別の応対をしています。



牧村大明神の幟旗



センドイシ(舟渡石・右側の茂みの中)を周る子供舟



境内のセンドイシ
※産土神……その土地に生まれた人を守る神

明科七貴の荻原区のお船祭りも終戦前後ころから「若貴連」という18歳から29歳までの青年たちが主体となってお船を出していましたが、若者の減少により平成11年には「若貴連」も解散します。そこで翌平成12年に「秋祭り実行委員会」が結成され、活動を開始しました。現在は地域の人々が「若貴連」の文字を染め抜いた法被を着て祭りに参加しています。



「若貴連」の法被を着て祭りに臨む荻原のみなさん

◆◆失われたオフネの伝統◆◆

穂高有明小岩嶽 現在、安曇野で多くのオフネが祭礼で曳行され担がれるなか、社会の変化や人の流れなどさまざまな要因によって、オフネの形が変わったり、オフネそのものが維持できなくなった地区もあります。

穂高有明小岩嶽の三輪社のお祭りでは、戦後もなくオフネをつくらなくなったといひます。その後、お囃子だけでも復活させようという動きもあったといひますが、残念ながらお囃子もオフネも現在まで復活することはありませんでした。そのうえ、三輪社は平成になってから火事によって本殿・拝殿・社務所などが焼失し、オフネの写真などもなくなってしまったそうです。

オフネも、オフネをつくる技術も失われてしまった現在、小岩嶽区では、お祭りの際には焼失を免れた舞宮に保管されていたオフネの

「櫓」を神社の境内に奉納しています。祭りでは、櫓に紅白の幕を巻き、四隅の柱に榊を立て、注連縄をめぐらせて神様の領域をつくります。

神事の際には氏子総代が提灯・御旗を掲げ、この櫓の周りを3周するという事です。



小岩嶽三輪社のオフネの櫓

明科の2地区 明科東川手潮沢区柏尾では、3月の彼岸に「風神様の祭り」を集落の西にある大日堂で行います。住民が病気にならないようにという祈願をする祭りですが、その大日堂からさらに集落の奥へ入ると「大天白社」がひっそりと佇んでいます。オフネはこの大天白社の祭礼で40年ほど前まで曳行されていました。オフネの曳き手は40人もいたそうですが、集落の過疎化などが原因でオフネを曳くことが出来なくなったということです。



柏尾のオフネと大天白社(昭和40年代)

また、同じ明科中川手大足区の矢ノ沢も同様にオフネをつくらなくなりました。矢ノ沢は明科で最高地点(標高900mほど)に位置する集落です。戸数は少ないものの集落内の結束が非

常に強いといひます。矢ノ沢のオフネは「担ぎブタイ」とも言われた珍しいオフネでしたが、昭和の終わり頃には担ぐことはなくなったそうです。もし、今日までオフネ担ぎの伝統が続いていれば、岩原山神社の舟とともに安曇野市内では珍しい担ぎ舟（ブタイ）としてこの展覧会にも登場していたかもしれません。



明科矢ノ沢の担ぎブタイ（昭和53年）

◆◆神事「オフリョウをわたす」◆◆

「オフリョウをわたす」 安曇野市内及び周辺のオフネ祭りでは欠かせない神事として『オフリョウをわたす』ということが伝えられています。オフリョウ・オフリョ・オフレなどと言ひ習わし、御布令・御布領・御風流などさまざまな当て字が使われます。お宮に曳かれたオフネを SENDOISHI と呼ばれる石の周りを3周させることが『オフリョウをわたす』あるいは『オフリョウがわたった』とする例が多くみられます。オフネは無く、祭事関係者の列が3周する場合や神楽殿などのまわりを周る例など、少し



SENDOISHI（豊科本村神社）

異なる形をとる祭礼もあります。松本市の例では、お祓いを受けたり御幣を授けることを言ひています。



SENDOISHIのまわりを周るオフネ（豊科新田神社）

オフリョウの起源 それとともに、オフネの先頭に行く人が持つ杉や榊の一枝や掲げる旗を『オフリョウ』と呼ぶことがあります。穂高神社に残る江戸時代の記録では『御振穂（オフリョウ）の儀』として振穂（旗）を先頭にオフネが神楽殿をまわっており、オフリョウの語源などとともに神事の内容が見えてきそうです。かつての祭典では、先頭に掲げられる旗が到着しないと祭りが始められない慣わしがあったことから、オフネ祭りで『オフリョウをわたす』ことの大きな位置づけが伺われます。



三階菱のオフリョウバタ（中央・穂高神社御船祭り）

◆◆安曇野のオフネそろいぶみ◆◆

あなたの身近なオフネ以外にも、たくさんのオフネが安曇野を曳かれ担がれています。「おらほのオフネ」を自慢するとともに、隣のオフネ祭りにも出かけてみませんか。

 ①両町区(穂高町・等々力町) (穂高地区) ②穂高神社御船祭り ③大人船 ④穂高神社 ⑤9月27日	 ①等々力町(穂高地区) ②穂高神社御船祭り ③子供船 ④穂高神社 ⑤9月27日	 ①穂高町(穂高地区) ②穂高神社御船祭り ③子供船 ④穂高神社 ⑤9月27日	 ①穂高区(穂高地区) ②穂高神社御船祭り ③大人船 ④穂高神社 ⑤9月27日
 ①穂高区(穂高地区) ②穂高神社御船祭り ③子供船 ④穂高神社 ⑤9月27日	 ①矢原(穂高地区) ②矢原神明宮例大祭 ③山車 ④矢原神明宮 ⑤秋分の日	 ①矢原(穂高地区) ②矢原神明宮例大祭 ③こども船 ④矢原神明宮 ⑤秋分の日	 ①富田(穂高地区) ②伊夜比古神社例大祭 ③舟 ④伊夜比古神社 ⑤9月最終日曜
 ①豊里(穂高地区) ②秋の例大祭 ③御船 ④豊里穂高神社 ⑤9月第3月曜	 ①嵩下(穂高地区) ②館宮神社例大祭 ③山車 ④館宮神社 ⑤9月第3月曜	 ①新屋(穂高地区) ②諏訪神社例大祭 ③山車 ④新屋諏訪神社 ⑤体育の日	 ①古厩(穂高地区) ②古厩大宮神社秋祭り ③船 ④古厩大宮神社 ⑤9月第2日曜
 ①立足(穂高地区) ②秋の例大祭 ③舟 ④立足諏訪神社 ⑤9月第2日曜	 ①枚(穂高地区) ②枚諏訪神社祭 ③舟 ④枚諏訪神社 ⑤体育の日	 ①柏原(穂高地区) ②例大祭 ③屋台(山車) ④日吉神社 ⑤9月第2日曜	 ①本村(豊科地区) ②春の例大祭 ③山車 ④本村神社 ⑤4月第2日曜
 ①新田(豊科地区) ②春の例大祭 ③山車 ④新田神社 ⑤4月第2日曜	 ①踏入(豊科地区) ②踏入八幡宮例大祭 ③舞台 ④踏入八幡宮 ⑤4月最終日曜	 ①細萱(豊科地区) ②例大祭 ③舞台 ④洲波神社 ⑤9月最終日曜	 ①重柳(豊科地区) ②重柳八幡宮例大祭・本祭り ③お舟 ④八幡神社 ⑤秋分の日

 <p>①重柳(豊科地区) ②重柳八幡宮例大祭・本祭り ③屋台(舞台) ④八幡神社 ⑤秋分の日</p>	 <p>①真々部(豊科地区) ②秋の例大祭 ③お船 ④真々部諏訪神社 ⑤9月第2日曜</p>	 <p>①熊倉(豊科地区) ②春日神社大祭 ③舞台、お舟 ④春日神社 ⑤4月30日</p>	 <p>①田沢宮本(豊科地区) ②春の例大祭 ③舞台、舟 ④田澤神明宮 ⑤4月第2日曜</p>
 <p>①田沢野田(豊科地区) ②春の例大祭 ③お船、舟 ④田澤神明宮 ⑤4月第2日曜</p>	 <p>①田沢南原(豊科地区) ②春の例大祭 ③舞台、舟 ④田澤神明宮 ⑤4月第2日曜</p>	 <p>①楡(三郷地区) ②住吉神社例大祭 ③お船・舞台 ④住吉神社 ⑤4月最終日曜</p>	 <p>①住吉(三郷地区) ②住吉神社例大祭 ③お船・舞台 ④住吉神社 ⑤4月最終日曜</p>
 <p>①中萱(三郷地区) ②熊野神社例大祭 ③お船 ④熊野神社 ⑤8月最終日曜</p>	 <p>①中萱(三郷地区) ②熊野神社例大祭 ③お船 ④熊野神社 ⑤8月最終日曜</p>	 <p>①岩原(堀金地区) ②岩原山神社の舟祭り ③大人舟(担ぎ舟) ④山神社 ⑤4月第4日曜</p>	 <p>①岩原(堀金地区) ②岩原山神社の舟祭り ③子供舟 ④山神社 ⑤4月第4日曜</p>
 <p>①中堀(堀金地区) ②春の例大祭 ③舞台 ④中堀神明社 ⑤4月第2日曜</p>	 <p>①下堀(堀金地区) ②春の例大祭 ③山車 ④下堀扇町諏訪神社 ⑤4月第3日曜</p>	 <p>①大足平(明科地区) ②秋の例大祭 ③柴舟(ローソク柴舟) ④大足諏訪社 ⑤体育の日の前日</p>	 <p>①光(明科地区) ②例大祭 ③オフネ・プタイ ④光五社 ⑤敬老の日</p>
 <p>①塔ノ原(明科地区) ②秋の例大祭 ③柴舟、舟、舞台 ④犀宮社(犀の宮神社ともいう) ⑤体育の日</p>	 <p>①潮(明科地区) ②潮神明宮例大祭 ③犀宮社 ④潮神明宮 ⑤5月5日</p>	 <p>①潮(明科地区) ②潮神明宮例大祭 ③柴舟 ④潮神明宮 ⑤5月5日</p>	 <p>①上生野(明科地区) ②上生野正八幡宮祭典 ③柴舟 ④上生野正八幡宮 ⑤体育の日</p>
 <p>①荻原(明科地区) ②荻原神社秋祭り ③柴舟 ④荻原神社 ⑤体育の日</p>	 <p>①小泉(明科地区) ②和泉神社例大祭 ③柴舟 ④和泉神社 ⑤10月第2日曜</p>	 <p>①田沢徳次郎(豊科地区) ②例大祭 ③山車 ④伊勢宮 ⑤10月第2日曜</p>	<p>①地域名(地区名) ②祭礼名 ③オフネの呼び名 ④祭礼の行われる神社 ⑤本祭の催行日(宵祭りはその前日) ※祭りの催行日は変更になることもあります。</p>

安曇野のオフネって、こんなにたくさんあるんだね。



コラム② オフネのいろいろ

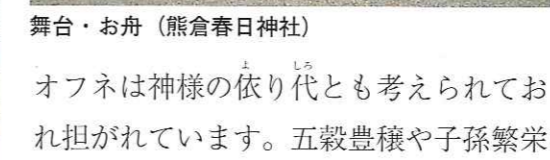
安曇野市内には現在42艘のオフネが祭礼で登場します。ひとくちにオフネといっても、その形・名称はさまざまです。名称は「オフネ」「フネ」「シバフネ」「プタイ」などがあります。形は一見して穂高神社御船祭りの御船を中心とした同形のオフネと、山車の前後(或いは前か後ろのみ)に刳木を張り出したオフネがあります。

穂高神社の御船は、江戸時代中期の記録では毎年伐り出した新木でつくることが決まられていましたが、山崩れで入山できなくなるなどして江戸末期には次第に古木が使用されるようになりました。しかし、現在でも穂高神社と同形のオフネをつくる場合、腕木や櫓などをのぞいてほとんどの材料を山から伐り出してつくっています。

オフネに使う材料、組み立て方、車輪、幕など、地域によってそれぞれの特徴があり、さらに、毎年変わる人形飾りだけでなく細かい飾りなどを見ていくとオフネ1艘ごとに個性があるといっても過言ではないでしょう。



オフネの構造(大人船・穂高神社両町区)



オフネは神様の依り代とも考えられており、さまざまな願いを乗せて曳かれ担がれています。五穀豊穡や子孫繁栄など、オフネの飾りに付けられた名前も、その願いが反映されていると言えるでしょう。

◆◆ オフネをめぐる新しい動き ◆◆

復活したオフネ 豊科高家の真々部諏訪神社では、社会情勢の変化から祭りへの参加者が減り、昭和40年にそれまで祭りの担い手であった「共親社」が解散し、お船も姿を消しました。

しかし平成11年、公民活動を契機に40年ぶりにお船が復活しました。平成13年には「お船と祭囃子保存会」が発足し、車輪が補修されて曳行も可能になり「オフリョウ」神事も行われるようになりました。

また、明科東川手の上生野正八幡宮でも平成22年、14年ぶりに柴舟が復活し、さらに穂高神社では、約300年ぶりに等々力区の御船を復活させようという動きもあり、安曇野でオフネへの関心が高まっていると言えます。

新しいオフネ祭りをつくる 穂高有明豊里区では、平成21年の豊里穂高神社秋の例大祭で初めて御船をつくり、曳行しました。

豊里区は太平洋戦争後の開拓地です。県内外の多くの人が入植し、大変な努力の末豊かな農地として、また現在は観光客が多数訪れるリゾート地として発展してきました。

御船がつくられる以前の数年間、豊里区では祭りでオフネに見立てた大八車を曳いていました。しかし、「子どもたちに夢を」という気持ちから、穂高神社や御船祭・穂高人形保存会、睦友社の協力のもと、多くの区民が力を合わせて御船づくりに邁進し、子供船を完成させました。

初めての曳行は試行錯誤の連続だったということですが、開拓された稲田の中を曳かれる子



稲田の中を曳かれる豊里区の子供船

供船は確実に豊里区の人々の心をつなぐものになったことでしょう。

現在も豊里区の子供船は地域の歴史や伝説をテーマにした木偶作り、子どもたちの囃子連などの活動が活発に行われています。

◆◆ オフネがつなぐ地域の輪 ◆◆

オフネ祭りの未来へ 古くは江戸時代からとされる伝統をもつオフネ祭りは、オフネ自体の組み立てから人形を含む飾りつけから曳行や奉納と、いくつかの段階が踏まれ多くの手が必要となります。祭りができるには、今年もオフネをやるという揃った気持ち＝地域全体の輪（和）が根底にあつてのことでしょう。展示会の事前調査で各祭典保存会などの方々と直に接するなかでも、祭りにかける強い思いと地域を盛り立てようとする心情を痛いほど感じてきました。

生活の近代化に伴い、地域で行なわれてきた催し物や祭礼がなくなるにつれ連帯意識も失われていく現状が久しく言われています。この状況のなかで盛行しているオフネ祭りを見つめ直すことは、今後の安曇野の祭りを考えるきっかけとなりそうです。あわせて地域のつながりや将来の郷土に思いを及ぼすことができたらと願います。そして、いつまでも安曇野の風を切つてオフネが曳かれることを強く期待します。



「安曇野のお祭り展Ⅰ～オフネがつなぐ地域の輪～」
プレイベント「オフネを曳いてお祭りを始めよう！」
で一般参加者が曳いたオフネ
(穂高区子供船・平成24年9月30日)

「ふるさと安曇野 きのう きょう あしたNo8」
発行日 平成24年10月20日
編集 安曇野市豊科郷土博物館
〒399-8205 長野県安曇野市豊科4289-8
TEL/FAX 0263-72-5672
URL: <http://toyohaku.jugem.jp>